



## 株式会社 ふたば

～活躍のフィールドを“ふるさと”から“世界”に  
 広げて「未来を測る。」「未来を創る。」企業～

### 企業概要

代表者：代表取締役社長 遠藤 秀文（えんどう しゅうぶん）  
 所在地：（本社） 従業員：45名（契約社員等含む）  
 双葉郡富岡町大字小浜字中央592 創業：1971年11月  
 （郡山仮本社） TEL：024-954-3832（郡山仮本社）  
 郡山市南2丁目76 FAX：024-954-3835（郡山仮本社）  
 資本金：1,000万円 URL：http://www.futasoku.co.jp  
 事業概要：建設コンサルタント、測量・用地調査、環境コンサルタント、  
 UAV（ドローン）、3Dレーザー測量・調査など



遠藤 秀文 社長

震災から6年が経過し、原発事故に伴う避難区域に指定されていた市町村では、順次、避難指示が解除され、住民帰還に向けた動きが進んでいます。そのような中、避難市町村の1つである富岡町では、今年4月に避難指示解除準備区域と居住制限区域の避難指示が解除される予定となっています。

株式会社ふたばは、農業土木の測量会社として富岡町に創業した企業ですが、震災後は建設コン

サルティング、環境コンサルタント、ドローン、3Dレーザー、MMSなどを複合的に活用した測量・モニタリングなど様々な分野に拡大し、活躍するフィールドは福島県のみならず、インドネシア、ツバル、モーリシャスなど海外各地にも広がっています。

当社は、避難指示に伴い拠点を郡山市に設けて、県内各地の土木や環境などの分野での復旧・復興に貢献してきました。今般、地元富岡町に本社は



ため池など農業土木が会社の始まり



ツバルでの沿岸災害対応の技術指導



モーリシャスでの海岸保全計画の技術指導

屋を再建し、同町をはじめとした浜通り地方の復旧・復興により一層尽力していきます。

今回は現在本社機能を置く郡山市の仮本社を訪ね、遠藤秀文社長に会社設立からの沿革、復興にかける思いなどについてお聞きしました。

### ○会社設立の経緯について教えてください ～農業土木の測量会社として1971年に富岡町で創業～

創業者は前の富岡町長でもあった私の父、遠藤勝也です。父は瓦屋を家業とする家の長男に生まれ、大学卒業後は県職員として農業土木にたずさわっていました。ところが、仕事に慣れてきたころ両親が相次いで病気に倒れ、父はまだ幼かった弟妹の面倒をみるため、職場の福島市と実家の富岡をバイクで行き来しながら、家を守りました。そのような生活を何年も続けましたが、無理がたたたり体を壊したため、県職員としての仕事と家庭の両立は難しいと考え、20歳代後半で富岡に戻りました。

その当時、双葉郡内には測量設計や建設コンサルタントを行う会社がありませんでしたが、公共工事が増えていた時期でありましたので、見るだけではなく自分がやりたいと思うようになり、県職員OBの方々に指導頂きながら、1971年（昭和46年）に会社を創業しました。

当初は2人で始めましたが、少しずつ社員が増えていき、1977年（昭和52年）に法人化し、1994年（平成6年）に双葉測量設計株式会社に組織変更し、順調に会社が成長していきました。

### ○社長に就任されるまでの経歴を教えてください

#### ～大手建設コンサルタント会社で海外事業にたずさわる～

私は大学を卒業後、東京の大手建設コンサルタント会社に入社しました。一方、35歳までには富岡に戻り、地域活性化に貢献したいと考えていました。「富岡に戻るまでの間に、視野と見識を広げるために経験を積もう」と思い、それができる会社として、入社試験を受けたわけです。

最初は空港関連の部署に配属となり、福島空港をはじめ、羽田や成田などを担当しました。2年目になると、海外事業部に若手が欲しいという話があり、上司に勧められて異動しました。同部ではODAの開発調査を担当し、海外24カ国を渡り歩きました。

同社に勤めているころ、父が町会議員そして町長となったことで、直接会社に関われなくなり、県職員OBの方に会社を手伝ってもらっていたのですが、30歳を過ぎたころから、父に「そろそろ戻ってきてくれないか」と頼まれるようになりました。会社での仕事はやりがいがあり、このまま戻っていいのかという気持ちもありましたが、35歳までに戻ると一度決めたことは守ろうと、35歳で富岡に戻り、当社の専務として会社を継ぐことを決意しました。

### ○実際に会社を継がれてどのように感じられましたか

#### ～経営者として中に入ってみると、いろいろなギャップを感じた～

会社の中に入ってみると、東京での厳しいコンサルタントの世界を経験してきた私には、これを立て直すには大変だなと感じました。経営者の立場としてみると、技術に対する考え方、成果品の品質のあり方、労務管理などの意識面、その他、改善すべき点が多く見られました。「福島県内だけでそこそこやっぺいこう」という視点であればそれでいいのかもしれませんが、「これから少しでも発展しよう」「お客様に喜んでいただく」「1人1人の社員がやりがいを持とう」というレベルに持っていくには「時間と労力がかかるな」

と感じました。中高生の時に当社でアルバイトをしていましたから、温かい社風で、優しい社員ばかりということはわかっていましたが、成長する企業としては欠けているものがあることに気付かされました。

サラリーマンとして雇われる立場から経営者になり、丁度、私が帰ってきたときは公共工事が急激に減少していたころとも重なって、会社を継続していくことの難しさを感じました。それでも3年ぐらいかけて、もがきながらも兆しが見え始め、また、地域にもかなり慣れてきて仲間も増え、これからと思っていた矢先に東日本大震災が発生しました。

### ○震災と原発事故で大変な苦労をされた体験をお聞かせください

#### ～社員は全員無事であったが、避難生活で社員が離散～

私は海の専門家ですので、揺れを感じた瞬間に「津波が来る」と直感しました。社員全員が無事であることを確認し、近くの高台に避難させました。その時、家族は海に近い自宅にいましたので、会社から車で迎えに行きました。高台に向かう途中に避難警報が鳴り、何とか高台に避難できましたが、建築して半年であった自宅と母屋は津波に流されてしまいました。

震災翌日には全町避難するようにとの防災無線が流れ、避難所に指定された川内村に車で5時間かけて避難しました。避難訓練も何もしたことが無い状態で実際の避難を体験したことになります。その後、棚倉町の叔父宅を經由し、妻子と母を連れて妻の実家である岐阜県まで避難しました。

町長として富岡で陣頭指揮を執る父を心配し、電話を何度もかけてもつながらず、震災4日後にようやく町の衛星電話につながりました。その時、父は私が岐阜県にいることに驚きつつ、「双葉郡はじめ相双地域の市町村にお世話になって今の会社があるのだから、復旧・復興でやるべきことはたくさんある。早く会社を再開して恩返しをなさい」と言われました。その時の私は家族を避難させることで頭が一杯でしたが、我に返り、「社員は今どこにいるのか」「どのように会社を再開

させようか」と考えました。

### ○どのように会社を再開させたのですか ～震災後1カ月目の4月11日に再開～

自宅を設計・施工してもらった南会津町田島の工務店から「福島県に戻ってくるなら、うちの空いている宿舎を使ってください」という申し出を頂きましたので、岐阜県に10日間滞在した後、私と母は福島県に戻りました。

再開はなるべく早い方がいいと考え、震災1カ月後の4月11日を再開日と決めた後、どこで会社を再開するか検討しました。南相馬、福島、郡山、いわきと見て回った結果、郡山で再開することとしました。毎日、田島から県内各地との間を往復し、多い日は600～700kmを運転したのでクタクタになり非常にきつい思いをしました。

再開することを決めてから、社員に電話をしたところ、震災時21人在籍していたうちの11人が戻ってきてくれました。ただし、1人は「やっぱり避難させてください」と言い再開翌日に退職しましたので、実質10人での再開となりました。

元々、相双地域での仕事がベースです。毎日、郡山から相双まで通うのは大変でしたので、相双にも拠点を探しました。当初は南相馬市に物件を探しましたが見つからなかったため、5月に相馬市に事務所を設けました。また、いわきでの津波関連の仕事が入ってくるようになりましたので、6月にはいわきにも事務所を設けました。

私は会社勤めの時に海外での事業にあたり、どのような大きな仕事であっても、まずトランク1つで現地に乗込み、ホテルや事務所を確保し、人を雇って、そこから仕事ができる環境を短時間で築く経験を積んできました。いざという時に何が必要で、無駄なものはいくつか、何を揃えておかないといけないかが身につけていました。そのため、震災翌日に会社運営に必要なパソコンを持ち出すことができたことが活きました。事務所が無かった時は、コーヒーショップなどでインターネットに接続し、物件探しや仕事の提案書づくりなどをしました。体とパソコンがあれば、仕事は何かできるものだと感じました。

## ○“ふたば”という社名にされた理由を教えてください

### ～サービス内容の変化に対応できる社名に変更～

私が社長に就任したのは2013年（平成25年）です。社長になってから3年あまりが経過しています。同年12月に現在の株式会社ふたばに社名変更しました。

福島の復興を本気でやろうとする時に、双葉測量設計という社名では守備範囲が決まってしまうかなと思いました。復興・創生は5年や10年ではなく、何十年という話になります。長期間仕事に対応しているうちに、サービスの幅や内容が少しずつ変わっていく可能性があります。仕事が変わったとしても社名が違和感ないよう、どのような業種・業態にも幅広く対応しうるシンプルな社名にしました。柔らかさがあり、将来性も感じられるので、「ふたば」と平仮名にしました。

## ○企業理念等についてお聞かせください

### ～「先義後利」で行動していく～

企業理念と社名は私が戻ってきてから決めました。まず、企業理念は「広い視野、そして情熱と探求心を高め、社会の元気エネルギーの礎を築くことに貢献する。」です。広い視野はコンサルタントにとって絶対外せないところです。言われたことだけをこなすのではなく、広い視野から自分に求められているものは何か考えなさいというこ

とです。

次に、社名は「先義後利」です。これは「道義」を優先させ、「利益」は後回しにするという考えです。相手の立場に立って何が必要でどういうことをしなければならないか、自分たちで行動して信頼関係を高めていけば、利は後から付いてくるということを社員に常々言っています。先利後義だと一過性になる危惧がありますが、先義後利だと結果的には長く利がついてくるものです。

## ○取扱分野と得意な分野について教えてください

### ～陸海空いろいろな角度からの3D測量・設計

### ～陸海空いろいろな角度からの3D測量・設計に自信あり～

農業土木の測量から当社は始まっています。時代とともに取扱う分野は拡大しており、私自身が前の会社で建設土木や環境コンサルタントを経験していましたから、当社に帰ったあと、それらの分野を新たに取り込むなど領域を拡げてきました。建設コンサルティングでは、海岸・河川、港湾・漁港、まちづくりなど幅広い分野を取り扱っています。環境コンサルティングでは沿岸域での環境保全などを取り扱っており、海外ではサンゴ礁保全のための計画と調査（マダガスカルなどで実施）などを行っています。地方の会社が海外でコンサルタントの仕事を落札することは少ないのではないかと思います。

現在は復旧・復興関連での建設コンサルタント



3Dレーザーキャナ



3Dレーザーキャナでの測量

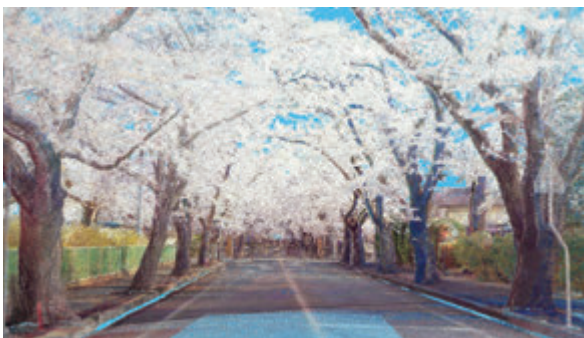


車上に載せた3Dレーザースキャナ

の仕事が多いですが、これから富岡に戻れば、環境再生に関する環境コンサルタント的なものが望まれるものと思われます。海外業務については、国内業務との両立に難しいところはありますが、これからも積極的にチャレンジしたいと思います。

得意な分野としては、ドローン、3Dレーザースキャナ、MMS（モバイル・マッピング・システム）、ラジコンボートなどを組み合わせて、陸海空からいろいろな角度で3次元の測量ができることです。陸海空それぞれ1つの分野の機械を持っている会社は多いですが、3つの分野を組み合わせる角度から調査できる会社はあまり無いのではないかと思います。また、MMSは車の上に3Dレーザースキャナを載せて走行しながら連続的に広範囲を短時間で測量・モニタリングができます。

富岡町の観光名所である夜の森の桜並木もドローンやレーザースキャナなどを使い測量し、花びら1枚まで鮮明に3次元データ化しています。ご存知のとおり、桜の花は満開の時間が本当に短いので、独自の手法を確立しデータを取得することができました。



夜の森の桜並木を3次元データ化



ドローンで空からの測量

### ○社員採用についてお聞かせください

#### ～いろいろな分野の学生が入社し活躍～

土木分野を専攻する学生に対する需要は大きく、新卒者は公務員や大手企業に流れる傾向が強いです。そのため、土木に限らず、様々な分野の学生を採用しています。3次元に関する業務はデータ処理やシステムエンジニア的なことに詳しい人が活躍できますので、いろいろな分野の人材を採用できて良かったと思います。

採用に関しては、会社のトップ自らが社員を採用したいという姿勢を見せるため、セミナーや学会で知り合った先生のところへ定期的に出向いて、学生の紹介を頂いています。企業は人で決まりますので、「いかにいい人材を採用するか。採用したあといかに育て上げるか」と考えていますから、採用試験の際は私自ら1人1人面接しています。

### ○富岡への帰還についてお聞かせください

#### ～富岡と郡山の「2地域事業」体制を検討したい～

この業界がいち早く戻らないと、本当の復興を進めることは難しいので、地元の拠点整備を急ぎました。今年1月に富岡で本社社屋と社宅、郡山で社屋の地鎮祭を行い、6～7月に3つの施設が完成する予定です。現在は郡山を拠点としており、相馬やいわきに事務所がありますが、双葉郡に通いながらですと、やれる範囲と量が限られますし、社員が疲労してしまいます。

大事なことは帰還する自治体のそばにある存在ということです。遠くから通うよりも、近くにいれば安心という面がありますし、国家プロジェクトとして復興業務にいろいろな地域からいろいろな



富岡社屋完成予想全景



郡山社屋完成予想全景

企業が集まっていますので、その企業と当社がお付き合いすることで、違ったサービスが根付くチャンスがあると考えています。

現在の社員は震災後に採用した社員が多いため、双葉郡以外の出身者が多く、単身生活になる社員も出てきます。そのため、富岡と郡山の働けるほうで働くという「2地域事業」など社員が働きやすい環境づくりを整備することを検討しています。

### ○富岡のまちづくりへの想いをお聞かせください

～富岡と避難先との組み合わせでの2地域居住を提唱したい～

まちづくりについては、1社だけでできることは限られてしまいます。同業者だけではなく、異業種の人と横の連携をして、企画立案を練って地域づくりに関われないか考えています。

震災避難から長い時間が経過していますから、富岡に戻る企業は少ないのではないかと懸念があります。そのため、戻ってくる企業や人はもち

ろん、新しく入ってくる企業や人とどう連携していくか、新しく入ってきたいと思えるようなまちづくりを進めなければなりません。

元々富岡に住んでいた人は別の土地でも基盤を作っていますので、その土地と富岡とを両立させる「2地域居住」的な住み方を提案したいと思います。2地域というと首都圏と地方というイメージですが、それを避難先と富岡という2地域でのモデルが作ればいかなと思います。それはこれからの少子高齢化社会にも応用できると思いますので、先行事例になることが期待されます。

### ○社長が取り組まれている被災地でのブドウ栽培について教えてください ～次の世代での地域の宝となることを期待したい～

ワインづくりというよりも地域づくりという位置づけとして、仲間たちと富岡でブドウ栽培を始めました。今、ブドウの苗を植えても、ワインづ



仲間とのブドウ植樹



次世代の地域の宝となるブドウ畑

くりにも最も適するのは40～60年後です。そのため、次の世代の人たちへの富岡の特産品として地域の宝になっていくことを目的としています。

ブドウに着目したのは海外20数カ国を歩き回っていた時のことです。いくつかの国で、いいワインがあることに気がきました。「その国のいいものと福島」という目で見ていると、「福島でもブドウをやるのでは」と思いました。

アメリカにハンフォードという、過去に核実験場があった地域があるのですが、一度廃墟となった所でワインづくりが始まり、その地域のワインは美味しいと評判になり、今では「全米住みたい街トップ10」にも選ばれるほどの復興を遂げました。ワインは世界共通の酒であり、評価されたら口コミでそれが広がります。ワインにはその地域の魅力を押し上げる力があります。

### ○今後の業界動向と貴社の将来図について教えてください

#### ～今の福島でしかできない事業にやりがいを感じたい～

この業界はインフラ整備が主ですので、人口が減少し税収が減ると、インフラへの予算が減り、仕事が減ることになります。従来の仕事だけ追いかけると、市場が非常に小さくなりますので経営を縮小せざるを得ないと思います。

福島では復旧・復興のプロセスを経験することによって、業界側の固定化された概念から、少しずつ広がるものが生まれてくると思います。そこをどのようにサービスの幅を広げ、サービスの質を高めていくかということが求められてきます。省力化や安全性を高めることなど、復興・創生とともに新しいサービスを作っていくことが大事です。

当社の将来図はその延長線上にあります。付加価値の高いサービスをどこまで深められるか、「地方から海外、海外から地方へ」という当社が掲げるキーワードをこれからも継続してやっていくことで、福島と海外との懸け橋の一助になればと思っています。

福島でしかできないことは環境再生や新たなまちづくりなど沢山あります。町を一から作り変え



会社のこと、ふるさと富岡について熱い想いを語る遠藤社長

るような事業ですので、これを次の世代につなげていければと思います。若い人たちには今、やりがいのあることをやっているということを感じてもらいたいです。

今後も富岡町や双葉郡をはじめとした県内各地の地域のために貢献して参りますので、よろしくお願いたします。

#### 【インタビューを終えて】

会社の存亡にかかわる未曾有の災害に直面したにもかかわらず、遠藤社長の地域に貢献しようという想いが早期の会社再開につながり、益々、会社が発展しました。当社は技術力や震災復興への取り組みなどが評価され、2015年（平成27年）3月に経済産業省の「がんばる中小企業300社」を受賞しています。

社長とお話をした印象としては、技術者としての緻密な部分と、世界を相手に仕事をしてきた逞しい行動力を併せ持った経営者だと感じました。会社の仕事と離れたブドウ栽培のお話でも、ふるさとのために頑張ろうという熱い想いが伝わってきました。

これから富岡町への住民と事業所の帰還が始まりますが、建設や環境のコンサルティングなどに携わる当社に期待される役割は大きいものがあります。福島の復興は遠藤社長をはじめとした熱い志を持った方々によって、一層加速していくものではないかと思いました。

（担当：高橋宏幸）